

 第26号 2021.3	青少年赤十字 賛助 ひろしま	青少年赤十字賛助奉仕団信条 1. 青少年赤十字の充実発展に協力奉仕する。 1. 赤十字思想の普及啓発に努め、平和な社会の実現に寄与する。 1. 志を同じくする人々と手を取りあい、研鑽に努める。
発行 事務局	広島県青少年赤十字賛助奉仕団 日本赤十字社広島県支部	〒730-0052 広島市中区千田町2-5-64 TEL (082) 545-5011

コロナ禍での青少年赤十字

日本赤十字社広島県支部事務局長

泉水 直



上げます。

賛助奉仕団の皆様には、平素より青少年赤十字の普及・発展並びに赤十字事業へのご理解とご協力を賜り、厚くお礼を申し上げます。

さて、昨年は国内外で新型コロナウイルス感染症が拡大し、様々な問題が発生しました。そうした中、日本赤十字社は、全国の赤十字病院を中心に、新型コロナウイルス感染症の治療や感染拡大防止のための活動等に取り組んでいます。また、加盟校に対し啓発活動の一環として、赤十字が作成した青少年赤十字向け教材「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう！〜負のスパイラルを断ち切るために〜」を送付しましたが、授業などで積極的に活用していただいているようです。

さらに、感染拡大に伴い、青少年赤十字の活動を自粛せざるを得ない中、広島県支部では初めての試みとして、加盟校各校において活動報告書を作成していただきました。実に幅広く、沢山の活動に挑戦していただいております。改めて指導者の皆様に感謝申し上げます。コロナ禍の今こそ、青少年赤十字の活動を通して人の苦しみや痛みを「気づき」、同じ人間としてどうすればよいかを「考え」、自分にできることを、勇気をもつて行動する「実行の人として」、是非とも成長していただきたいと願っています。こうしたコロナ禍でも、自然災害はやってきます。

特に令和2年7月豪雨災害では、九州地方を中心に甚大な被害が発生し、コロナ対策に万全を期しながら、中四国地方からも医療救護班の派遣を行いました。県内の赤十字加盟校におかれては、生徒・児童自ら自分たちに何ができるかを考え、豪雨災害への募金活動を行ってくださいました。これもひとえに賛助奉仕団や指導者の先生方の平素からのご指導の賜物と感じている次第です。

青少年赤十字の活動期間は決して長くはありませんが、優しさや思いやりといった根柢の部分は、皆さんが今後生きていく上での大きな糧となるものと信じています。広島県支部としても、賛助奉仕団の皆様と手を携えて、青少年の育成を全力で支援して参ります。今後とも、青少年赤十字活動のさらなる飛躍に向け、皆様のご支援・ご協力を賜りますようお願いよりお願い申し上げます。

青少年赤十字活動の活性化について

委員長 日高敬司



今年度は新型コロナウイルス感染症の影響のために、あらゆる活動に大幅な制限がありました。なかでも、学校は

休校となり学習のみならず、あらゆる活動がストップしました。休校後も最小限の活動に止まり、青少年赤十字活動も、国・県段階での活動も殆ど休止の状態が続いています。しかし、学校単位では地道に活動を続けておられます。残念なことに、青少年赤十字県大会、トレーニングセンター、協議会など人



昭和43年度青少年赤十字補導者研修会

が大勢集まる活動は制限され、開催されていません。中でも、直接赤十字の精神を児童・生徒に涵養する場であるトレーニングセンターは残念でなりません。さて、本県の青少年赤十字活動を振り返ってみると、国泰寺中学校の加藤惣一校長の尽力により、全国から目標とされる県でありました。写真は私が昭和43年に参加した教員トレセンです。このときはスタッフと参加者併せて60名で状況を呈していました。しかし、広島県ではある時期から、加盟校が激減しました。その後、平成19年に当時の小野裕組織振興課長の尽力により県内各教育委員会や学校等に働きかけをしていただき、一挙に加盟校が増加しました。しかし、残念なことに加盟校が増加しても指導者がいないため形骸化した活動に終わっているところが多々あります。

それは、加盟校が少ない状態が長く続いたため、以前熱心に活動しておられた方々が定年を迎えられ、その後新たな指導者が生まれなかったからです。また、学校からよく言われることは、教育内容が格段に増加しており、学校教育に青少年赤十字に時間を割くことができないということです。

しかし、県内の学校のホームページを見て気づいたのですが、特色ある活動として取り上げられているのは青少年赤十字活動と重なっていることが多いのです。その活動に赤十字の精神があれば、その児童・生徒にとって一生の宝になります。なぜなら、自分が奉仕した何分の一かが、回り回って自分に返ってくるからです。実は、私が住んでいる地域奉仕団の役員の方々と賛助奉仕団の意見交換会を行ったときのことです。その人たちがなぜ奉仕活動をおこなっているかを自己紹介を兼ねて話されるのを聞きました。学生時代にJRCをやっていたという人が案外多いのです。例えば、他県から就職で来県し、定年になったので、高校時代やっていたJRCを思い出して参加している。また、学校時代にJRC活動をしていて、子育てに一段落したので参加している、等々です。学校での短い期間であっても大きな影響を与えているものだと思っただけです。

そこで、いくつかの提案をしたいと思います。

- 1 奉仕団と支部事務局とタッグを組んで教育委員会や校長会等で紹介する場を作っていく。
- 2 各地域奉仕団と賛助奉仕団との会合を作り、学校での具体的な活動について知っていただく。
- 3 地域奉仕団と連携し、加盟校の掘り起こしを担って頂く。
- 4 学校のホームページからJRC活動と関連が深

いところを訪問する。

これらのことは、以前から行っていたことと重複する点もありますが、児童生徒の心の中に赤十字の心を灯していきたいと思います。

(実践報告)

保育所におけるJRC活動について 社会福祉法人広島和光園 広島和光園保育所 園長 吉田邦子



コロナウイルス感染拡大により、保育所では、感染予防をしながらも子どもたちの健全な育ちを保障するために、

日々努力をしています。しかしながら、どうしても普段通りに保育を営むことは難しく、特に、本来なら保護者の方が参加して行う行事については制限を余儀なくされる状況となっています。

10月に予定していた運動会もその一つです。どうしても時間短縮や人数制限が不可欠でしたが、その分、想いの詰まった運動会にしたいというのが、職員の共通の願いでもありました。

そんな中、保育士から「運動会の遊戯の曲に、お祭りにちなんだ曲を選んでどうか、広島の人なら聞きなじみのある『花車』を使ってみよう」という声があがったのです。世間では軒並みイベントが自粛され、広島の大きなお祭りであるF・F（フラワーフェスティバル）も中止となっていました。「コロナ禍で沈んだ心が少しでも晴れやかになるように」というのが保育士の想いでした。F・F実行委員会

様のご協力もあり、曲も提供していただくことができました。



「よさこい・花車」年中組が、鳴子を持って踊りました

運動会は保育園に隣接した公園で行います。練習時には本法人の高齢者施設のおじいちゃん・おばあちゃんが車イスで見に来てくださいました。運動会当日には、あたたかい応援メッセージもいただきました。運動会の方・高齢者施設のおじいちゃん・おばあちゃん、

そしてそこで働く職員の耳に届き、少しでも元気になる、そんなエールになったのなら幸いです。応援してくださった施設のおじいちゃん・おばあちゃんたちの気持ちが嬉しかったようで、後日、子どもたちからお礼のメッセージを書きたい！と言いだし、作成後に渡しに行きました。直接対面することとは難しいので所長さんにお渡しし、皆さんにはその様子を窓越しに見ていただきましたが、中にはぼろぼろと涙を流す方もおられたようです。入所されている方はご家族との面会もままならず、寂しい思いをされていることでしょう。コロナ禍の不安と闘っておられると思います。子どもたちが人と人との心をつないでくれた、そんな風に感じました。



「おじいちゃん・おばあちゃん、応援ありがとう」
デイサービスの所長さんにメッセージをお渡ししました

大きな取り組みではなかったかもしれませんが、傷つきがちな皆さんの心を少しでも前向きになれるようにと取り組めたことは価値のあることではなかったか思います。

学校におけるJRC活動について 神石高原町立油木小学校

教頭 上野康博



本校は令和2年度、初めて青少年赤十字活動に加盟しました。今まで行ってきた地域への奉仕活動や健康・安全に関する活動を教師主導ではなく、児童主体とし自ら考えながら活動できるものにしていきたいと思い、加盟することにしました。

児童と話し合い、自分たちにできる活動は何かについて考えました。美化委員会では、「地域の方に喜んでもらえる花いっぱい運動」として学校の花壇に全校で植えることを呼びかけて実施しました。また、みんなが気持ちよく登校できるように考え、児童玄関を掃くようにしました。

保健委員会は、コロナウイルス感染症対策のため、手洗いの励行やチェックを行っています。児童会本部は、あいさつ運動で各学級をまわり、あいさつを行うようにしています。今では3・4・5年も時々あいさつをして回るようになり広がりを見せています。エコキャンプ運動にも取り組み、地域の方からたくさん持って来て頂けるようになりました。自分たちで変えることができるという自己決定によって

自己有用感を育てることができつつあります。



1年生による花壇の花植

また、西日本豪雨災害では、校区内で起きた土砂崩れにより道路網が寸断されるということが起こりました。児童宅には被害はありませんでしたが、豪雨災害等自然災害の恐ろしさを感じ、防災教育の重要性を改めて感じました。

そこで、令和元年から各教科の学習と防災教育を関連付けて防災教育を行うようにしました。道徳の内容に合わせて阪神淡路大震災のことに触れ、地震の時の「自助・共助・公助」の大切さと、もしもの時にどうすればよいのか考えました。また、青少年赤十字防災教育プログラムを活用し、理科と関連付けて風水害が起こりそうなときの行動について考える時間をとりました。

今年度は、コロナウイルス感染症対策のため臨時休業期間が長く実施することができませんでしたが、

児童引き渡し訓練や防災プログラムによる各学年に応じた防災訓練を実施する計画もありました。まだまだ取組の緒にいたばかりですが、赤十字の精神である「国際理解・親善」「健康・安全」「奉仕」を大切にし、日常生活の中での実践を積み重ね、「しなやかさ」「たくましさ」を育成する児童の育成に努め、青少年赤十字活動の活性化を進めていきたいと思っています。



エコキャップを集めに教室を回っているところ

上殿小学校におけるJRC活動について

安芸太田町立上殿小学校

教頭

片桐克敏



上殿小学校では、年度初めにJRC入団式を行い、4月から

迎えた新しい仲間を加えて様々な活動に取り組んでいます。その中でも代表的な取組の一つがやまゆり訪問です。上殿小学校の敷地に建立されている「平



山ゆりの像（訪問50周年記念）

和を祈る山ゆりの像」には、「昭和26年6月16日、山間で清らかに、香りたかく咲く、ささ百合の花に願いを託して、病院を見舞い、原爆病に苦しむ人を慰め、平和の大切さを学ぶことを発意し、第一回慰問を行う。」と記されています。以来、広島赤十字・原爆病院を訪問する「やまゆり訪問」は、本年度で70回目を迎えました。

やまゆり訪問では、野山に咲くササユリを花束にして届けてきました。近年は数が少なくなってきましたが、地域の方にお手伝いをいただき、学校近くの栽培地でササユリを育てています。また、訪問前には、花束やアレンジメントを作るために、たくさんの花を地域や保護者の方が届けてくださいます。やまゆり訪問は、多くの方に支えられ、ササユリに平和への願いを込めながら大切に受け継がれてきました。



地元のひとと共にササユリの採取

本年度も、広島赤十字・原爆病院や町内の福祉施設を訪問し、ササユリの花束や千羽鶴を届けたり、入所されている方との交流を行ったりする計画でした。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の影響に

より、これまで69回続いてきたやまゆり訪問の実施が、本年度は危ぶまれる状況となりました。そうした中、今年も訪問したいと願う児童の思いや関係機関の皆様の御尽力により、代表児童が関係施設を訪問し、職員の方にササユリの花束や千羽鶴を手渡したり、入所者の皆様に視聴していただけるように児童のメッセージや歌声をDVDに収録したりするなど、当初の計画を変更しながら何とか実施することができました。例年のように直接触れ合うことはできませんでしたが、入所者の皆様に大変喜んでいただいたというお手紙を訪問後にいただきました。コロナ禍にあっても赤十字の基本理念である「人道」にもとづき、やさしさや思いやりの心を育む貴重な体験になったと考えています。



ヤマユリ送呈式

平和への願いと当たり前の生活が送れる喜びは、今も昔も変わりません。ササユリに込められた思いに触れ、これまで支えてくださった方々に感謝しながら、これからもやまゆり訪問を継続していきたいと考えています。

学校におけるJRC活動について

呉市立蒲刈中学校

養護教諭

松本京子



呉市立蒲刈中学校は、赤十字の基本理念である「人道」に基づき、生徒会活動や地域貢献活動に積極的に取り組んでいます。今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で様々な行事が中止や延期となり、環境や教育活動も大きく変化しました。しかし、このような時だからこそ相手を思いやる心の大切さを学び、社会の変化に柔軟に対応する力を育成するよい機会であると捉え、JRC活動に取り組んでいます。

○ピンチはチャンス! 「KNS」で感染症予防!

KNSとは「Kamagari junior high school New Style」を意味しています。KNSを合言葉に、こまめな手洗いや体温測定などの健康管理、3密の回避など様々な感染症対策を行っています。その中で特に難しいと感じたのは生徒同士のソーシャルディスタンスです。良好な人間関係を築く上でコミュニケーションは欠かすことができません。学校生活の中でソーシャルディスタンスをとることは、子ども達にとって大変なことだと改めて感じました。そこ

で掲示物の作成や生徒会や委員会活動を中心に感染症予防の啓発を行いました。



移動はソーシャルディスタンスで

○生徒総会での提案と取り組み
今年には熱中症対策だけでなく「感染症予防のために手で触らずに手指の消毒ができるものが欲しい」という要望が生徒から出されました。そこで、生徒会で話し合い、文化活動部が足踏み式のアルコール消毒器具を製作することとなりました。その後、校内に設置され、たくさんの方が利用しています。

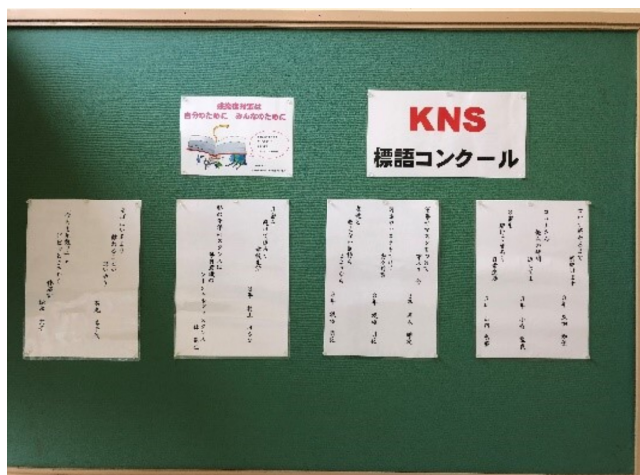


製作中の生徒



生徒の力作
足踏み式アルコール消毒器

○KNS 標語コンクール
全校生徒及び教職員を対象に標語コンクールを行いました。感染症に対する意識を高め、「ともに頑張ろう」という気持ちを伝え合い絆を深めるよい機会となりました。



KNS 標語コンクール
(校長賞・教頭賞があります)

○いじめ撲滅運動
生徒会が中心となり、いじめ撲滅標語コンクールやいじめについて考える道徳の授業、いじめ撲滅標語を持つてのあいさつ運動を実施しました。生徒全員がいじめ撲滅の標語を考え、地域の人たちに呼びかける活動を通して、「いじめをしない・させない・許さない」という思いや、人と人との心の繋がりを強め、いじめのない学校作りに大きな役割を果たしています。



いじめ撲滅あいさつ運動

いのちと健康の大切さを学び、「やさしさ」や「思いやり」を行動に移せる生徒の育成に向けて、今後も生徒たちとともにJRC活動に取り組んでいきたいと思っています。

広島市立安西中学校でのJRC活動について

広島市立安西中学校

養護教諭

蓮沼如月



本校は、自然豊かで落ち着いた環境にあり、全校生徒451人が学ぶ中規模の学校です。

「自主・敬愛・勤勉」を校訓とし、「自主性に富み他者を敬い、何事にも一生懸命に努力する生徒の育成」を学校教育目標とし、その実現に向け、生徒・保護者・地域・教職員が一体となり取り組みを行っています。本校で今年度行っているJRC活動を3つ紹介します。

1つ目は、「あいさつ運動」についてです。毎朝、生徒・保護者・地域の方・教職員が正門前に並び、登校する生徒に対してあいさつを行っています。多いときには正門前に20人から30人近くの人が並び、お互いに元気なあいさつをしています。



早朝あいさつ運動

2つ目は、「掃除用具の点検活動」についてです。これは、生徒保健美化委員会が毎月実施している委員会時に、各クラスの担当する掃除場所に掃除用具が規定の個数揃っているか確認をしています。また、この際に破損している掃除用具の交換や修繕を行っています。本校生徒は毎日熱心に清掃活動に取り組んでおり、その活動をより充実したものにするため、定期的に掃除用具の状態を確認し、不具合があった場合にはすぐ対応できるようにしています。この活動によって物品の不足や破損にいち早く気がつくことができている。また、委員会がないときにも気がついた保健美化委員が掃除用具の交換を行うなど、保健美化委員の意識も高まっています。



保健美化委員による掃除用具の点検・交換

3つ目は、「生命誕生の学び」についてです。日本赤十字広島看護大学から、妊婦体験ベルトと新生児人形をお借りし、命の誕生の神秘さとかげがえのなさを深く感じ、自他の生命を尊重する態度を養うことを目的に行っています。今年度は助産師の方

の講話を聴き、その後妊婦体験ベルトの着用や、赤ちゃん人形を抱く体験活動を行いました。助産師の方の講話は心情に迫る、具体的にわかりやすい話で、生命誕生の奇跡を感じ、生命について深く考えることができました。また、今後の性との関わり方においても、自他の生命を尊重していこうとする意欲につながることができました。その後の、妊婦体験ベルトの着用や赤ちゃん人形を抱く体験では、身をもつて妊婦の大変さや赤ちゃんの抱き方の難しさを実感し、赤ちゃんを抱くことで生徒の表情が自然と柔らかく優しくなっていました。



生命の誕生を実感する男子生徒

今後も継続し、生徒たちとともに成長していける活動を行っていこうと思います。

学校におけるJRCの活動について 県立加計高等学校芸北分校

教諭 森川博子



本校は県内唯一の分校で、在校生100人の小規模校ですが、小規模校だから出来る事、

芸北地域でしかできない体験活動を学校行事や授業において多く取り入れ、積極的に地元企業・地域施設等と連携・協働し活動を行っています。今年度は赤十字の理念「健康・安全」に重点を置き活動を行いました。その第一回目は、株式会社アンデルセン芸北100年農場と連携し、地産地消をテーマに芸北食材を使用した石窯ピザ作りの校外学習を実施しました。ピザのソースやトッピングは生徒達一人一人が事前学習で考え、高校生に必要な栄養素を踏まえて考案しました。



校外学習・石窯ピザの完成

第二回目は、ANAクラウンプラザホテル広島大森一憲シェフをお招きし、芸北八幡高原のラム肉を使用し、豪華なフランス料理を教わりました。近年、食の外部化や簡便化が進み、一人で食べる個食、家庭での調理体験の減少、地域の特産品を知らないなど、全国的に見ても食に纏わる課題が多くあります。「食べることは、心身ともに健康で、幸せに生きること」と、日々指導しております。連携授業をきっかけに、地元の特産品に興味関心を持ち、生徒達が高校卒業後、生涯に渡って豊かな食生活を送ることができるよう、今後も地域や企業と連携を図り活動を進めていきたいと思っています。



シェフの技フランペに挑戦（八幡高原フレッシュラム肉）

コロナ禍の中で舟入高校の生徒とにも活動して

広島市立舟入高等学校

教諭 池本博司



2020年4月から2か月、新型コロナウイルス（COVID19）感染拡大により、学校は

緊急事態宣言で休校となった。1年生は、初めての高校生活での友達づくりや登下校や授業に慣れる重要な時期であった。またクラブ活動においても、どのクラブを選ぶか重要な時期であった。2年生は、1年生のクラブの勧誘もできないまま、主要な行事である文化祭もクラブ合宿も中止であった。そして、3年生は最後の文化祭もなく、受験生としていつの間にかクラブを引退する状態であった。そんな不安な自宅待機の時期が終わり、6月に高等学校が再開した。校外活動も校内活動さえもできない4か月の空白の後、JRC部で何をすべきかを真剣に考えた。その際、柱になったのが日本赤十字社の新型コロナウイルス感染症に対応するマニュアルである「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう！負のスパイラルを断ち切るために」であった。このプリントを生徒自らが何度もクラブ内で説明しあった。そして、今大事なことは、マスクや手洗いや消毒を徹底することで感染症を防ぐことである。身を守ろうとすると見えない敵COVID19に感染することへの不安や恐れから起こる差別や偏見をなくさなければならぬ。そのためには、身近な人同士で互いに助け合い、組織としてサポートすることが重要であることに気づいた。

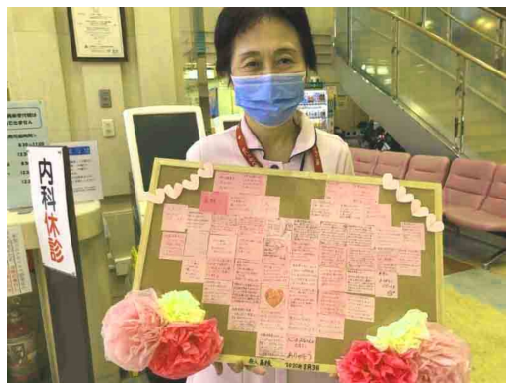
ある日、コロナウイルスと最前線で闘っている医療従事者への応援と感謝の気持ちを舟入高校全体として届けたいという意見がJRC部の話し合いで発案された。



医療従事者への応援メッセージの呼びかけ

この取り組みは、JRC部↓生徒会↓職員会議と校内で話し合いを繰り返し、校内全体で理解され実行されたプロジェクトでした。舟入高校の総合展示ホールに趣旨を書いたポスターを設置し、5cmマスの色紙に医療従事者の方々への応援や感謝の気持ちを書いてもらい、設置した回収箱に入れ、それをJRC部がコルクボード60cmマスに貼った。多くの生徒たちは医療従事者の方々がそれを見て元気になれるようなものを届けたいと協力してくれました。現在、そのメッセージボードは舟入市民病院で働いている方々に読んでいただける部屋に飾られています。高校生たちの感謝の気持ちが伝わった瞬間でした。や

り方は色々な応援や支援の方法がありますが、「生徒の言葉で元気や勇気をもたらした。」と医療従事者から言ってくれたことは本当にこの取り組みをしてよかったと痛感した。



医療従事者への応援メッセージボードを
舟入病院の看護師さんに手渡したところ

この頃、文化祭が中止となり、3年生たちはこの「コロナと最前線で闘っている医療従事者へのメッセージボード」の活動を持って引退となった。その3年生を送る会で先輩たちは後輩たちに自分たちの想いを後輩たちに伝え、後輩たちはそれを受け継いでいる。毎年、舟入高校JRC部には、涙と笑いが溢れる「3年生を送る会」となる伝統がある。

舟入高校のJRC部の部員数は、現在1・2・3年生合計して41名です。JRC部としては人数が多いので役割を分担して、無理のない活動をしていきます。なぜ、部員数が多いのかを考えたことがあります。ボランティア活動が大切にされる時代の流れにのったことやその活動への取り組みへの理解が生徒に繋がったなどが考えられますが、私は本校のオーブ

ンスクールでのJRC部の活動が大きいのではないかと感じています。

それは、生徒発案で行っている「お悩み相談室」です。中学生の受験の悩みや進路が決まらない悩みや恋の悩みや小論文の書き方などをJRC部員が直接相談を受け答えるものです。志望校の決め方や舟入の良いところを生徒自身の言葉で伝えたり、先生の優しいところなど学習環境の良さを話したり、各教科の勉強の仕方をアドバイスしたりしている。その時、クラブの勧誘は全くしていないのであるが優しい先輩と後輩の繋がりがその時生まれているのではないかと顧問としては思っている。



オープンスクールでのJRC部「お悩み相談室」

クラブとして部員の人数が多いことよりも、クラブ員の同級生同士の仲の良さや先輩後輩の繋がりの

強さが舟入高校の伝統であると考えている。従って、全員が習得するべき「心肺蘇生やAEDの一次救命措置」においても先輩から後輩へ正確に伝えることで自主的に練習する風土が生まれた。初めて学ぶ1年生をメインにして自立を促し、その補助に2年生がまわり指導させることで、自信を持たせることができた。特に今年はコロナ禍における感染防止の観点から、昨年との違い一人一人の体形を使い、マスクをして胸骨圧迫を行った。人工呼吸は直接接しないように工夫した。さらに、消毒を徹底して1メートル以上離れて心肺蘇生を行った。生徒達は身をもって胸骨圧迫を長時間することの体力や精神力が必要なことと、命を守るためには誰かが近くについて交代してもらえることの大切さを学んだ。

また、毎年参加している冬の「NHK海外たすけあい募金」でも今年はコロナ禍における感染防止のため例年と違い感染予防の観点から、保護者からの許可のないものは参加しなかった。参加した生徒はフェイスシールドや手袋・マスク着用での募金活動となった。とても寒い日の募金活動で、カイロ・手袋・マフラー必須であった。そんな中、幅広い年代の方から募金していただいた。その瞬間は、言葉にならないほどとてもうれしかったと生徒たちは言っていた。「海外の人を助けよう」という人の気持ちがあった。しかし、募金に対して理解されていない方から嫌な言葉をかけられたり、無視されたり目を背けられる経験も生徒たちはある。逆に応援の言葉をかけてもらったり、詳しく話を聞かせてくださると好意的な人もいた。生徒達は、みんなで声を出し合って、世界中にいる助けたい人を助けられるようにという思いで募金活動を頑張っていた。募金し

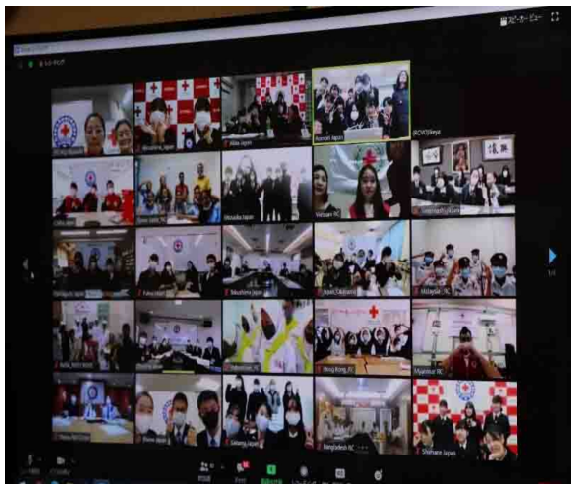
てくれた人の中には、舟入高校の制服を見て後輩達がかんばっているからと募金してくれた先輩の方がおられたと聞いて感謝の気持ちで一杯となった。



NHK海外たすけあい募金

今年の夏は、第44回全国高等学校総合文化祭は、新型コロナウイルス感染防止のためWEB開催となり、舟入高校はボランティア部門に出場し、日頃の活動を発表した。校内献血での呼びかけや、災害発生の募金活動、世界の子どもたちへのワクチン接種を支援するペットボトルキャップの回収、学校施設・備品の充実のためのベルマーク回収、校内の美化のために週2回の清掃活動や広島市内における献血の呼びかけボランティアなどを実践している。毎年10月末頃にJRCの広島県大会があり、各校の取り組み等を発表している。今年は新たに、角膜移植の資金調達のため舟入高校総合展示ホールにその趣

旨を書いたポスターを設置し、コンタクトレンズケースを回収している。地味ではあるが、多くのベルマークを整理したり、多くのペットボトルキャップやコンタクトレンズケースを洗っている生徒の姿に感動する。



21か国41県とのオンライン交流会

コロナ禍の中で、高校生ができることを生徒自らが気づき、考え、一緒に行動した。そして、コロナ禍だからこそボランティア活動が重要であることがわかった。校内だけでなく校外においても広島県の他の生徒が赤十字の精神に基づき、世界の平和と人類の祉に貢献できるよう、さまざまな活動を学校教育の中で展開し、ボランティア活動に興味を持つ高校生が学校をこえて献血や募金活動などに取り組んでいる。例えば、2020年11月15日(日)に行われた「青少年赤十字国際交流大会」では、日本赤十字社広島県支部からZOOMによって世界オンライン交流会に参加した。

広島県代表として各県の代表や世界各国の学生たちと新型コロナウイルスをめぐる偏見について意見の交換をした。そして、世界各国のコロナウイルス感染予防に対する情報が交換され、これまで考えつかなかったことや、これから取り組みたいことに気づかせてもらった。世界は繋がっているの、今こそ助けあわなければ、世界は守れない。参加した生徒達の活動から最も大切な事を教えられた。

今コロナ禍の真つ只中であるから、人と人はソーシャルディスタンスで距離を保って密を避けている。しかし、一緒にこの困難を乗り越えようと応援メッセージを発信し続け、人と人が心で繋がることが最も大切なのだと感じている。日本赤十字社のスローガンである「人間を救うのは、人間だ」の言葉の重みを噛み締めている。



オンラインによるJRC国際交流大会へ参加

（地域奉仕団の活動） 共に支える青少年赤十字のご縁を通して

三次市三和町赤十字奉仕団

前委員長 林 敬子



黎明暁をつくる東天のもと、希望溢れる新たな気持ちで新春を迎えることの喜びが当たり前と誰もが思っていたところ、昨年早々、新型コロナウイルスが瞬く間に全世界で猛威を振るい、私たちの日常生活は、短期間で一変してしまいました。丑年を迎えても新型コロナウイルスの収束は、ワクチン接種の可能性もありますが、まだ見通せない状況であります。普段と変わらない持続可能な地域社会の実現に一日も早く収束出来まことを願う昨今であります。

さて、三和町赤十字奉仕団は、平成6年5月に創立しました。今年で27年目を迎えます。赤十字の基本理念であります「人道」を基軸として人間のいのちと健康・尊厳を守るために団員一丸となって様々な活動をしてきました。振り返ってみると、防災訓練での炊き出し担当・一人暮らし高齢者（80歳以上）と団員の交流会・献血事業・暑中見舞い、年賀はがき（80歳以上一人暮らしの方で最近民生委員が担当）・三和町ふるさと元気まつりへ参加し、リサイクル品販売と赤十字奉仕団のPR活動・AED（自動体外式除細動機）使用方法講習会・救急法・三和町奉仕団歌の作成（20周年記念）・自衛隊音楽隊との団歌披露・陸上自衛隊海田駐屯地視察等々。

三次市三和町は、自然豊かな田園のまちで人口は、

令和3年1月1日現在で2688人。わが町の65歳以上の高齢者比率は25.3パーセントとなり、まさに人口の約半分はお年寄りです。

平成28年7月の総会において、委員長の大役を仰せつかり、日本赤十字社広島県支部主催の年2回あります委員長会議で、青少年赤十字（JRC）の実態を知る機会がありました。青少年赤十字は、赤十字の基本理念である「人道」に基づき「やさしさ」や「思いやり」を行動に移せる青少年の育成を、学校教育の中で実践することを目的として、生命と健康を大事にする「健康・安全」。人間として社会のため、人のためにつくす責任を自覚し実行する「奉仕」。広く世界の青少年を知り、仲良く助け合う精神を養う「国際理解・親善」の実践目標と、「気づき」注意深い生活を心がけ、自ら課題に気づく。「考え」原因や問題解決の筋道を考える。「実行する」解決のために実行する。の態度目標を掲げてあります。この青少年赤十字の内容・目的に強く心打たれ、早速三和小・中学校を訪問し、資料提供と説明を行い、両校長先生に賛同していただき、令和元年5月20日に加盟校として登録していただき現在に至っております。

三和小学校は全校児童82人、三和中学校は35人の小規模校ではありますが、小中一貫教育を基軸として多くのことに取り組んでおられる中で、笑顔あふれる学校・三和町をめざしたスマイルキャンペーンを春と秋のそれぞれ1ヶ月ずつ取り組み、登校時1週間ずつあいさつ運動が実施されています。

小学校の目標は、「ともに学びあい、主体的に行動する児童の育成」。自他を認め合い、主体性を発揮し、ともに伸びる三和の子供。全校児童でのSD

GSの取り組み。

中学校の目標は、「自ら未来を拓き、力強く生きる、三和の子の育成」。故郷を愛し、主体的に学び、グローバル社会で活躍する生徒。心豊かで、礼儀正しい生徒。強い意志を持ち、自らを鍛え、挑戦し続ける生徒。

これからも赤十字活動を通してさまざまな学びを得ながら明日を担う子供たちの一人ひとりが命と健康の大切さを自覚し、虐待、いじめ、不登校、ひきこもり0「ゼロ」に向けて、学校・地域・社会そして三和町赤十字奉仕団員共々健全育成を進めてまいります。

（特殊奉仕団の活動）

奉仕活動で大切にしたいこと

健康・栄養奉仕団 中下涼



毎日毎日、ひとときでも頭から離れない新型コロナウイルスに関するニュースのこと。世の中が大きく変化している今、たくさんの方の不安や複雑な想いを胸に生活されていることと思います。マイナスイメージばかりが強調されがちですが、振り返ってみると以外にも「できるようになったこと」も多かったのではないのでしょうか。

コロナウイルスによって、奉仕団活動が明らかに減りましたが、一方で増えたものがあります。空白の「時間」です。今までの私は、活動をしては咀嚼するひまもなしに次の活動へ…と、次々と飛んでく

る新しいボールをキャッチすることに無我夢中でした。新しいことに挑戦するのは若い私の任務だ！と思っていたのです。それはそれで必要な期間でしたが、今は少し違う感情を頂いています。



自宅で新作料理を研究しているところ

「時間」ができたことで、ひとつのことを深く考えられるようになりました。県境を越えた人とツールを用いて交流をしたり、好きな料理に没頭する一日を作り出すこともできます。すると、世の中にはまだ私の知らない支援団体がたくさんあること、コロナで見通しが暗い中でも工夫をしながら活動を続けている人がいること、Webツールを用いれば普段会えない人や得られない情報に出会えること、何気なく作った料理が、災害時に応用できるアイデアのヒントになった等、今まで深められていなかった出来事の多さに気が付きました。

感性を磨き、赤十字の枠の中だけで活動をとどめず、周囲の団体と穏やかに交流しながら活動の輪を広げていく。これって活動する上で基本だけれども、一生懸命になりすぎるといついっせいに忘れてしまいがちなことですよ。



非常食アレンジレシピ

自分にとつての当たり前前、世の中にとつての当たり前前、そして赤十字にとつての当たり前を見直す時なのかもしれません。「どんどん赤十字奉仕団の力たちをアップグレードしていこう！他の団体とのよこじまたてじまを濃くしていこう！コロナ禍だからこそできることを、できる人が、できる時にやってみよう！」そんなことを思うこの頃です。今は基本的に立ち返り、将来を見つめ直す良いチャンスなのかもしれないですね。

青少年赤十字トレーニングセンター での思い出

日本赤十字社広島県支部

元組織振興課長 脇谷孔一



「サツサツサ 音がする 校長先生の音がする」私が出席した三次市作木の小学校で行われた校長退任式の中で、児童全員での送る言葉の一節です。青木勇先生の学校での様子が表現されました。

青木先生との出会いは、大和町の青少年スポーツセンターで毎夏開催されていた青少年赤十字トレーニングセンターでした。青木先生はトレセンのプログラムの合間、時間があればいつも箒を持ち館内の掃除をされていた姿が思い出されました。VS（ボランティアサービス）の実践が日常化されていること、それが「校長先生の音」として、子どもたちに自然に沁み込んでいる様子に、心がふるえました。

また、高等学校の門田脩三先生の車（ライトバン）の荷台には、いつも集めた空き缶が積まれています。駐車した周辺に散乱していた空き缶や捨てられる空き缶があれば回収されていました。まとまった量になるとリサイクルセンターで換金し、義援金として寄せる活動を黙々と続けておられました。VS活動が自然に身についた先生方の姿に、強い印象を受け本物の力を感じ、背筋が伸びました。

トレセンに担当の日赤支部職員として初めて参加した際、夜の反省会場で、当時の上司であった福原道彦事業課長が「私は、金持ちにはなれなかったが人持ちになれた。青少年赤十字で出会った人が、自分を支え育ててくれた。大切な財産です。出会い

を大切にしていこう。」と語られた。赤十字職員として仕事にどう向き合い、いかにあるか、自分が目指したい姿の道標をいただきました。福原課長からは、その後も業務にあたり厳しくも温かい指導を受け、範となる先輩・上司でした。

当時の指導者トレセンでは、赤十字や青少年赤十字の講義を加藤惣一先生や森田寛先生が担当されていました。加藤先生は、「青少年赤十字教育というものはない。学校教育の中に赤十字の精神や考え方を取り入れた青少年赤十字活動がある。指導者となる教員が、学校での教育にいかにかかしていくかが大切である。」と述べられ、赤十字と学校教育とのあり方の要をご教示いただきました。森田先生は、「赤十字は愛と叡智の結晶である。」と赤十字について熱く語っておられました。思いを込めた講義が進み、やや紅潮したお顔で話される姿には秘密がありました。私が担当者として水差しを用意していましたが、お茶に見える液体は、実はウイスキーの水割りでした。初めて職員とした参加したトレセンに、支部で用意した物品に、サントリーオールドが1本含まれていました。反省用かと思っていました。が、「森田先生用のスペシャルドリンクだ」と、福原課長から割り加減まで教授いただきました。

その森田先生とは、30年程前となりますが、「広島県青少年赤十字再建40周年記念誌」編集作業に1年以上ご一緒し、資料探しや写真収集、原稿作成に励みました。そして、編集委員での最終的な作業と打合せを済ませ、後は印刷・発行をするだけとなる区切りをつけたその晩に、先生は自宅で思わぬ事故にあわれ入院生活を余儀なくされました。あの日、作業を終えて支部を出られる時のホッとした表情の

先生の笑顔をはっきりと覚えています。

青少年赤十字の歴史の中で、加藤先生、森田先生と全国でも名だたる指導者に親しく接していただき、直接のご指導を受けることができたことは、私にとって大きな財産となりました。

日本赤十字社に就職して38年が過ぎ、令和3年3月末で定年退職を迎えます。職員として青少年赤十字の仕事の中で出会った方々は、私の中の宝物です。皆さまとの出会いに感謝して、今後も赤十字の一員として励んでまいります。

森田寛先生を偲んで

副委員長

河戸靖子



平成25年4月、深夜に電話が鳴った。「私は森田寛の娘です。が、今夜父が天国に召されました。病院から、十年もの間、見舞って下さった河戸さんにもお知らせをされたら」ということで、私に訃報を知らせてくださった。

私は、退職後青少年赤十字の指導者田中誓二先生の勤務校の校長先生から、『地域社会を大切にしようの良さを、俳句や俳画で表現できる児童生徒の育成』を手伝ってほしいということで、東広島市立乃美尾小学校に伺っていた。その通り道に、森田先生の入院されている病院があることを知り、訪問を始めた。先生にお目にかかりたい一心であった。授業で使った野の花をバケツにいれて持参したりした。自然科学がご専門の先生はお喜びになられ、身を起して。学名や和名の由来などお話ししてくださいまし

た。その花を「花瓶に生けて。」といわれるとそのようにし、病院の廊下にも活けたりしました。

先生の移動は車いすでしたが、表情やお声はトレセンで活動されているときと同じで生き生きとされていきました。「スイスのジュネーブに行った」話は盛り上がり、つぎの訪問時には、写真を持ち寄ったりするほどでした。スイスの赤十字社を訪問したことやソルフェリーの森を歩いたことなどで会話が弾みました。

将来のトレーニングセンターのありかたなども考えておられてご指導いただきました。

そんな時に、「大和町のトレセン会場にあったアンリ・デュナンの石碑に書かれていた言葉が思い出せない。」と言われたので、現地に行き写真に撮って先生にお見せしました。「気づき、考え、実行」でした。先生は、「やはりそうか。」とお喜びになりました。

話に熱が入るあまり四十分の面会時間を超えることもありました。そんなときは、先生が「この子は教え子で」と話されて許されることもありました。

時には私は、鬼のパンツをはいたり、魔女になって訪問したりしました。患者さんや病院の先生も喜んで下さり、看護師さんも手拍子を打って下さりました。

私と森田先生との「出会い」は、教師生活三年目に青少年赤十字加盟校に転勤になり教員トレセンに参加した時でした。多くの指導者の中で、中心におられたのが森田先生でした。青少年赤十字の理論、実践などを聞かせていただきました。この出会いが私にとってもっとも大切なものです。私の実践もそれ機会に少しずつではありますが、歩を進めています。

きました。（その頃のトレセンの参加希望者は多く県内だけで百名を超えていました。）

森田先生が亡くなられて十数年が経つ今でも多くのことが思い出され、私たちの力になっています。

先生は、これからはずっと、私たちの青少年赤十字活動を見守ってくださることでしょう。

廿日市市立大野東小学校4年生と地域防災会が連携しました

副委員長 野田 崇



昨年10月のある日、大野東小学校の先生から「4年生の総合学習のプログラムに『地域防災会の活動をしよう』を計画したいので協力して欲しい」と連絡が入りました。

大野一区防災会（宮島口地域・宮島口上地域・宮島口東地域・福面地域の4防災会の連合組織）は、2012年の発足当時から地域の小・中学校には連携した防災教育の重要性を提案していました。また、廿日市市教育委員会には「地域の地理的特性から子どもたちは、大野東小学校・阿品台西小学校・宮島小学校に通学しており、3校の防災教育が異なると災害発生時や日常活動に混乱が生じることが予想され。防災教育プログラムの共通性を図って欲しい」と提起していました。

突然の申し込みでしたが、喜んで引き受けることにしました。研修内容の打ち合わせで、「大野東小学校に防災教育プログラムがないこと、研修内容は

防災会に委ねる」と確認しました。そこで、青少年赤十字防災教育プログラム「まもるいのちひろめるぼうさい」を紹介し、これをもとに展開すると説明し了解されました。

○研修テーマ 「災害から自分のいのちを守る」

11月25日（水）8:20 大野一区在住の4年生27名が大野東市民センターに集合し、8:30から研修が始まりました。

1 災害の備える地域防災会の備蓄

大野一区防災倉庫に備蓄してある防災機材・資材の説明と使用方法を伝えました。特に地震時の「ジャッキ・のこ・ボール」に関心を持った様子でした。



防災倉庫内の備蓄品の説明

廿日市市「大野一区ニュース」から転載

2

災害に備える大野東市民センター

大野東市民センターの防災施設の見学・非常時のマンホールトイレ・非常用発電機と太陽光発電・防災倉庫に備蓄している防災機材・資材の説明を

3 市民センターの職員から受けました。

非常食体験
大野一区の総合防災訓練に参加している児童もいたので、ハイゼックスによる炊き込みご飯を防災会の給食・給水班の指導で作りました。



非常食作り体験

廿日市市「大野一区ニュース」から転載

4 防災の知識と行動

「まもるいのち ひろめるぼうさい」と作成中の大野一区のハザードマップを使い、「地震が起きたら」や「台風が接近したらどうする」を4年生と一緒に考えました。

最後に、ハイゼックスによる炊き込みご飯を食べ、研修を終わりました。災害から命を守るためには、日頃の人と人の繋がりの大切さを伝えました。

令和2年度青少年赤十字賛助奉仕団活動報告

幹事長 寺田 宣文



今年度は新型コロナウイルスの関係で活動が大幅に中止に至りました。

○会議等

4月17日 第1回 役員会

総会は書面にて開催

12月3日 機関誌編集会議

○登録式へ出席

4月13日 海田町立海田西中学校

(出席 山中章敬、支部職員2名)

4月27日 広島市立五月が丘中学校

(出席 山中章敬、支部職員2名)

6月16日 広島市立湯来東小学校

(出席 日高敬司、支部職員2名)

○青少年赤十字関連事業の報告(別掲)

令和2年度青少年赤十字賛助奉仕団総会(報告)

幹事 采谷宣子



今年度の総会は、4月17日に開催予定していましたが、新型コロナウイルス感染症予防のため、総会は急遽中止し、資料送付に替え、次の事項を配布させていただきました。

1 令和元年度事業報告及び決算

2 令和2年度事業計画及び予算・役員案

令和元年度青少年赤十字加盟概況 (加盟校数・加盟率)

令和元年度青少年赤十字加盟校数

(単位：園、所、校)

校種	全国		広島県	
	加盟校数	加盟率	加盟校数	加盟率
幼稚園	863		9	
保育園	878		27	
小学校	7,184	36.4%	122	25.5%
中学校	3,622	34.9%	89	32.6%
高等学校	1,932	38.6%	41	31.3%
特別支援校	201	39.1%	5	27.8%
合計	14,680	35.7%	293	28.5%

※加盟校数は、「令和元年度青少年赤十字の概況」から掲載

令和2年度広島県賛助奉仕団役員

委員長	日高敬司
副委員長	河戸靖子、野田 崇
幹事長	山中章敬
幹事	寺田宣文
監事	采谷宣子
顧問	下野玲子、吉丸朝美 横田二郎、光本凉子 曾山和彦、田中 博 塚本晃史、平越幸男 水野善親、

編集後記

今年度は、記事にも沢山ふれられているように新型コロナウイルスによって全てが一変しました。青少年赤十字活動の事業がどのように変わったかについて、下記に掲載し後世に残したいと思います。

そのような中であっても、学校の日常活動が従来と変わりなく行われているのは幸いでした。これもひとえに学校の先生方がコロナを警戒しながら、知識を持ち、乗り越える行動を児童・生徒に与えたからに違いありません。

今回特に目新しく登場したのが、舟入高校の実践にありますようにオンライン会議です。従来はフェイス・to・フェイスのみでした。これを契機に、日本全国のみならず、世界の人々と直接実践を交換し、より幅広くかつ深い繋がりと活動が進んでいくことを願っています。

編集委員

日高敬司、河戸靖子、野田 崇、采谷宣子
山中章敬、寺田宣文

令和2年度青少年赤十字事業報告

広島県支部主催行事

月	日	事 業	対 象	場 所	備 考
4	—	指導者協議会総会・役員会・常任委員会	加盟校長、指導者	日赤支部	文書審議
6	27～28	指導者研修会	指導者	日赤支部	令和2年11月に延期(新型コロナウイルス感染症のため)
7	26～31	日・韓交流事業(広島受入)	中・高校生、指導者	広島県内	中止(新型コロナウイルス感染症のため)
7	27～28	国際交流プログラム	中・高校生、指導者	広島県内	中止(")
8	4～9	日・韓交流事業(韓国派遣)	中・高校生、指導者	韓国	中止(")
8	17～19	広島県中学校トレーニング・センター	中学生	グリーンヒル郷原(呉市郷原)	中止(")
8	20～22	広島県小学校・高等学校トレーニング・センター	小学生・高校生		中止(")
9	7	指導者協議会常任委員会	常任委員	日赤支部	役員12名
10	24	広島県大会	メンバー、指導者等	広島市立国泰寺中学校(予定)	中止(新型コロナウイルス感染症のため)
11	—	指導者研修会	指導者	日赤支部	中止(")
2	12	研究会	指導主事、指導者	日赤支部	中止(")
3	未定	指導者協議会常任委員会	指導者	日赤支部	3/22,23日のいずれかにて実施予定

本社・5ブロック主催行事

10	8～9	5B青少年赤十字賛助奉仕団協議会・研修会	賛助奉仕団	岡山県支部	書面開催
10	13	第5ブロック指導者協議会会長並びに事務担当者会議	会長、事務担当者	山口県支部	Web会議開催
11	9	全国賛助奉仕団協議会総会、第1回役員会	賛助奉仕団	福島県	書面開催
11	15	青少年赤十字国際交流集会	高校生	広島県支部	オンライン開催 生徒2名 指導者1名
1	8	指導主事対象研究会	指導主事	日赤本社(東京都港区)	オンライン開催
3	20	スタディー・プログラム	高校生	広島県支部	オンライン開催